

## 東日本大震災における県外避難者をスポーツでつなごうプロジェクト

立教大学松尾研究室 B

○鮎川佳奈

寺杣侑将

沼崎裕介

松原諒太

### 1. 緒言

2011年3月11日に発生した東日本大震災は広域にわたって甚大な被害をもたらした。原発事故や津波の影響で、震災発生時に住んでいた地域から離れた場所での生活を強いられている県外避難者が今なお多く存在する。そのうちの多数が仮設住宅や県が支援する借り上げ住宅での生活を営む一方で、現在も避難所での生活を送る人々がいる。避難所は全国でたった一つだけであり、それは埼玉県加須市の旧県立騎西高校にある。

避難所という隔てられた空間は外とのつながりが希薄になりやすい。また、双葉町の生活の一部となっていた「農」が失われたことにより、生きがいを見出しにくくなると考えられる。加えて、避難者意識を消し去ることも難しい。そのため、先のわからない不安が多い状況の中で、前向きに将来を見据えにくくなってしまっているのではないかと。私たちは埼玉県加須市の避難所にいる県外避難者に焦点を当て、スポーツが持つ力でバラバラになってしまった県外避難者同士のきずなや避難先周辺地域の住民とのつながりを持たせ、避難所を出て生活する上で長く住まう関係を築きあげたい。

本プロジェクトの提言では、双葉町復興まちづくり委員会が策定した「仮の町」の構想に加え「季節のスポーツでつなごうプロジェクト」の開催により、コミュニティ形成の問題や避難者意識の二極化を解決することを目指したい。

### 2. 旧埼玉県立騎西高校避難所

- ・全国で唯一の避難所である。
- ・生活者は福島県双葉町からの県外避難者である。
- ・平成25年9月2日時点で101人が生活しており、そのうちのほとんどが高齢者（平均年齢70歳）。
- ・双葉町の方針により年内閉鎖予定である。



<http://www.tokyo-np.co.jp/feature/tohokujisin/archive/oneyear/photo.html>

### 3. 福島県双葉町に関して

#### 3.1 福島県双葉町の現状

- ・全町民（6,894人）が県内外へ避難している。
- ・東京電力福島第一原発事故における放射線の影響により国が今後4年避難指示解除をしないと決定したため、帰りたくても帰れない。

### 3.2 双葉町が「復興まちづくり計画」における「仮の町」計画

#### ○長期的視点

→高齢者が安心して住まうことのできる良好な生活環境の整備をする。

#### ○コミュニティ機能の確保

→相互のコミュニケーションがとれる拠点づくり。

→分散した状態であってもつながりを感じる事が出来る「一つの双葉」を目指す。

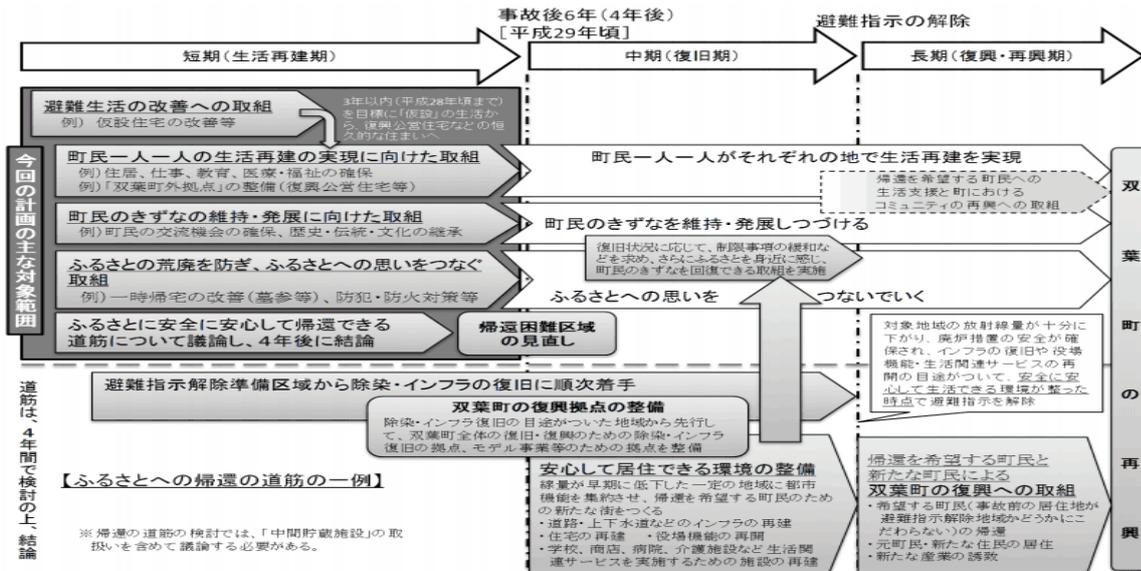


図1. 双葉町の復興・再興に向けた道のり 「双葉町まちづくり計画（第一次）」より

### 4. 双葉町民が抱える課題

筆者らは3度にわたり加須市の旧埼玉県立騎西高校避難所に出向き、10名の県外避難者の方にヒアリングを実施した。その結果から見えてきた課題は以下のとおりである。

#### 4.1 コミュニティの構築・発展

→失われてしまった双葉町でのきずなの再構築と、今後長期的に生活することが見込まれる地域での新たなコミュニティの形成が必要である。

#### 4.2 二極化

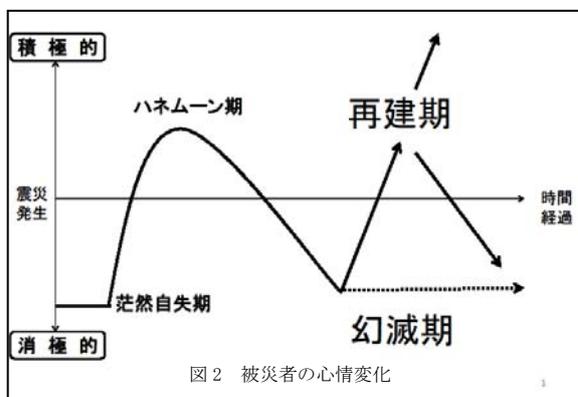


図2 被災者の心情変化

県外避難者の中には、幻滅期から再建期に向かえず、停滞したままの生活を送っている人がいる。また、受け身の支援が多いことから自分が避難者であるという意識がどうしても消えにくいいため、再建期の人も幻滅期に戻る可能性がある。

→幻滅期から再建期に向かわせ、再建期から幻滅期に戻させない支援が必要である。

#### 4.3 「農」からの乖離

双葉町から県外避難してきた高齢者の多くは生活に「農」が根付いていたが、避難先では失われてしまった。しかしながら「農」に再び携わることを望む声は実際に上がっており、日々の生活に物足りなさを感じている県外避難者は多い。

→日常の中に「農」を取り戻すことで、生きがいや充足感を感じられるようにする。

### 5. 季節のスポーツでつなごうプロジェクト

#### 5.1 課題を解決するうえでのポイント

○つなぐということ、主体的なかかわりを引き出すこと

(1)3つのつなぐ

- ・同地区の県外避難者同士。
- ・県外避難者と地域住民。
- ・県外避難者と他県他地区の県外避難者。

→一体感を感じ取ることができ、きずなが深まる。

(2)日常でのつながりを持たせる

- ・いつでも気軽に集まれる場所を設ける。

→コミュニティの構築と発展へのきっかけづくりとなる。

(3)日常的な活動を取り戻す

- ・農業従事者が多いため、「農」との結びつきを取り戻す。

→自身で農園を耕すことにより生きがいを見出すことができる。

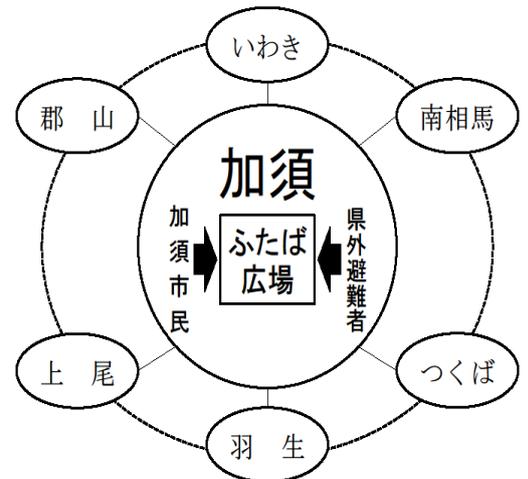


図3.3つのつなぐ

#### 5.2 プロジェクトの内容

○日常的なつながりの架け橋となる「レクスポふたば」

- ・季節ごとにスポーツイベントを行う。
- ・加須を中心とした双葉町からの県外避難者が集まる主要地区が参加する。

○絆をより深める「ふたば広場」の設置

- ・旧埼玉県立騎西高校避難所生徒ホールを開放し、新たにそこを「ふたば広場」とする。
- ・ふたば広場の付近で県外避難者と加須市民が一緒になり、耕すための農園を開放する。

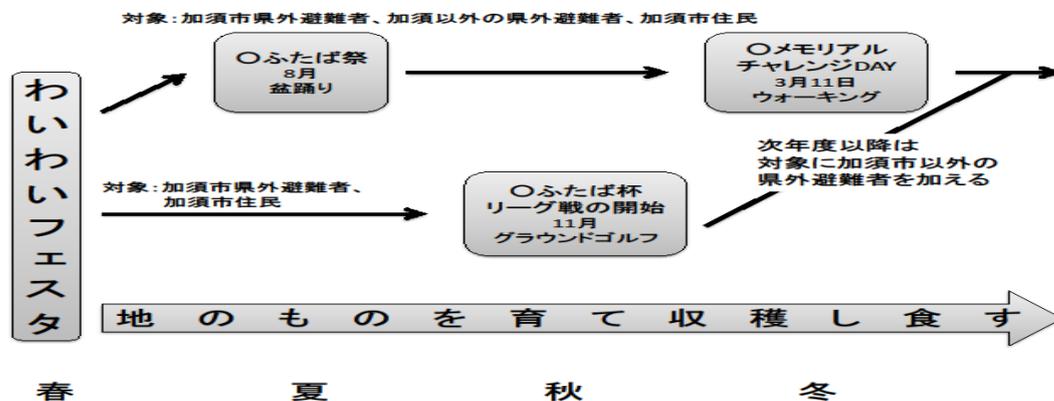


図4. 季節のスポーツでつなごうプロジェクト1年目

わいわいフェスタを契機として対象ごとに支援を行う。まず、加須市県外避難者、加須市以外の県外避難者、加須市住民を対象として8月に盆踊り大会、3月にはメモリアルチャレンジDAYを実施する。次に、加須市県外避難者と加須市住民を対象としてグラウンドゴルフのチームを編成し、リーグ戦を実施する。次年度以降リーグ戦については、対象を加須市以外の県外避難者にも広げ、スポーツを通じたつながりづくりを行う。また、わいわいフェスタ、ふたば祭では県外避難者が育てた農産物を持ち寄りみんなで食す。

## 6. 「季節のスポーツでつなごうプロジェクト」の組織化と運営

### ○ふたば会

5つの団体（公募した県外避難者、スポーツ推進委員、NPO 法人タクイハート、加須自治会、各避難先の代表）が連携をはかり、各イベント・行事の企画・運営を行う。プログラムコーディネーターがまとめる。サポーターとして、学生ボランティア団体が参加する Joy Study Project と立教大学東日本大震災復興支援室を活用する。旧埼玉県立騎西高校を拠点とするため、加須市にある双葉町支所に協力を依頼する。

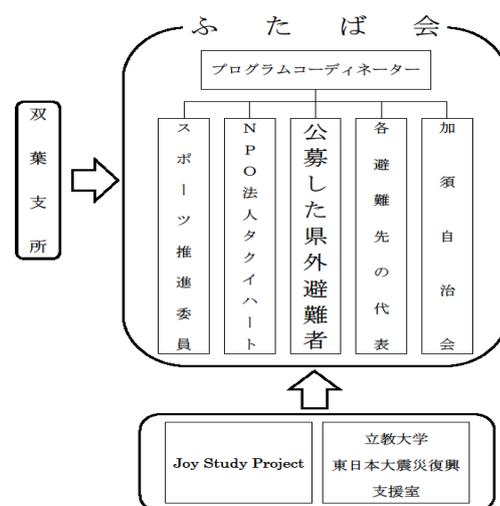


図5. ふたば会の組織図

## 7. 期待される効果

- ・ つながるということを身近に実感できることによって、ふたばという空間の中に属しているという意識が高まる。
- ・ 生きがいを見出すことによって、前向きな姿勢になれる。

## 8. 参考文献

- ・ 東京都福祉保健局  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/chusou/jouhou/saigai.html>  
(最終アクセス 2013/9/3)
- ・ 福島県双葉町公式ホームページ  
<http://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/>  
(最終アクセス 2013/9/15)
- ・ 福島県双葉町（平成25年6月）「双葉町復興まちづくり計画（第一次）～ “町民一人一人の復興” と “町の復興” をめざして～」
- ・ 復興庁ホームページ  
<http://www.town.fukushima-futaba.lg.jp/>  
(最終アクセス 2013/9/5)